

2006 年度 Kent 地区高校訪問記（生徒編）

- | | | |
|---------------------------|---------|-----|
| (1) 2 週間の出会い | 3 年 3 組 | I.K |
| (2) 楽しかった 2 週間 | 3 年 4 組 | T.T |
| (3) 忘れられない 2 週間 | 3 年 4 組 | Y.R |
| (4) かけがえのない思い出 | 3 年 5 組 | S.H |
| (5) We share the same sky | 3 年 5 組 | S.D |

2006 年度 Kent 地区高校訪問記（教師編）

- (1) Kentwood 高校編（2007 年 3 月 18 日（日）～ 25 日（日））
養護教諭 濱崎 優子

- (2) Kentlake 高校編（2007 年 3 月 25 日（日）～ 4 月 3 日（火））
生物科 小西 喜朗

2 週間の出会い

3 年 I.K

私のアメリカへの出発は不安ばかりでした。言葉が通じるかも分からない家で過ごすという不安、日本を 2 週間も離れてアメリカで生活するという不安……。ただ 1 つ、心強かったことと言えば、阿武野生を含めた 8 人でアメリカに行けるということくらいでした。でも、日本に帰って来た今、アメリカに行けて本当によかったと思っています。たくさんの人との出会い、日本とアメリカとの文化の違い……。いろいろな物を目でみて、実際に感じることができました。

1 週目、アメリカに着くとそれぞれのホストと Kentwood の先生が迎えに来てくれていました。私のホスト、Beth は大人っぽくて、可愛いという印象でした。1 週目は、英語しか使えない！ということに必死で、とにかく知っている単語を並べて、自分の言いたいことを伝えたり、電子辞書を使いながら会話をしたりしました。それでも、Beth やアメリカで友達になった子たちは、頑張って聞き取ってくれて、会話が出来たのは本当に嬉しかったです。また、Beth は、日本語を勉強していたので Beth が日本語で助けてくれることもありました。日本語と英語の勉強を助け合いたいと言ってきて、Beth は英語で、私は日本語で授業中に手紙を交換していたので、Beth の手紙で何の授業をやっているか分かるということもよくありました。

1 週目に通った Kentwood 高校では、いろいろな点で日本と全く違っていたので、驚くことばかりでした。まず、朝から私が驚いたのは、たくさんの生徒が車で登校しているということでした。Beth もそのうちの 1 人だったので、私も最初の 1 週間は Beth の車で登校しました。そして、学校に着いて、さらに驚いたことは、日本よりも明らかに寒かったので、マフラーまで巻いて登校した私たち日本人に対して、アメリカの高校生は T シャツに

ビーチサンダルという、私たちには考えられない格好で学校内を歩いていました。アメリカにいれば寒さはなれる！と言われたけれど、結局 2 週間マフラーは手放せませんでした。授業は、お菓子を食べながらだったり、友達と喋りながらだったり、とてもリラックスした雰囲気でした。私には、授業は何を言っているのか理解できるはずもなく(笑)、唯一理解出来た授業といえば日本語クラスでした。でも、授業中にも、どのクラスでもたくさんの子が話しかけてくれて、授業が分からなくても楽しく授業が受けられました。授業にはその雰囲気から想像できないほど、全員が積極的に参加していて、日本の静かな授業とは正反対でした。また、授業の種類も豊富で、自分の勉強したいこと・自分の将来に必要なことを勉強する、という日本の大学のような感じだったので少し羨ましかったです。

そして 2 週目のホスト、Lynn は本当に明るくて活発な子で、朝起きてから夜寝るまで暇な時間がないというくらいお互いの国の遊びを教えあったり、いろんなことを話したりしていました。特に Lynn は折り紙を気に入ってくれて、日本人の私でもあれ・・・??と思うような難しい物まで一緒に作りました。折り紙の本を持って行ってよかったです・・・(笑)

2 週目に通った Kentlake 高校は、本当にきれいで、とても広い学校でした。学校中、同じような造りだったので、自分達だけで好きな授業を見に行った後にホストの教室に行くときは、何度も学校の中で迷子になりました。

私がアメリカで過ごした 2 週間は本当に毎日新鮮で、すべてが私にとって新しいものばかりでした。家での生活・食べ物・学校・・・本当に 2 週間驚きの連続でした。特に、食べ物には、目が点になることもよくありました。結局、2 週間ずっとアメリカのジュースは全く飲めないままだったし、ケーキもカラフルでかわいい見た目からは想像できないほど甘くて、一口食べただけで気持ち悪くなるようなものも多かったです。最後のほうには、普通の食事よりも、甘い物に手を出すのが怖くなっていたほどでした。

1 週目も 2 週目もホストの 2 人や家族はもちろん、学校の子もみんな本当に優しく、苦労したことと言えば、自分の思ったこと全部を正確に伝えられないということくらいでした。だから、またいつか英語を話せるようになって、ホストの 2 人や友達に会いに行きたいです。

私を受け入れてくれた家族や、先生方、そして kentwood・kentlake でフレンドリーに話しかけてくれたみんなに本当に感謝しています。貴重な体験を本当にありがとうございました。

楽しかった2週間

3 年 T.T

私はアメリカで約 2 週間、とても貴重な体験をすることができました。

1 週目は、Stacey という中国人の女の子の家に泊まりました。

初日は本当にコミュニケーションの難しさを実感しました。なんとな～く聞き取れても、いざ自分の思ってることを言おうとしたら単語を並べることしかできず...でもせっかく来たのだから、自分からいろんなことを喋ってみようと努力しました。

アメリカについたその日が私の誕生日だったので、ホストがケーキを用意してくれていたのですが...私は衝撃を受けました！

それは高さ 10 センチほどで、とても甘い（砂糖は日本の 3 倍くらい）ケーキでした。このホームステイでとにかく驚いたのは、甘すぎるアメリカのお菓子の数々です（笑）。

次の日から kentwood 高校に通い始めました。授業は日本と全く違っていて、授業中にご飯を食べる子や床で寝る子、色々な子がいました。人種も黒人や白人、中国人、ヒスパニックなど本当にさまざまでした。みんな喋りかけて来てくれたり、写真を撮ったりして楽しかったです。

放課後は家でゆっくりしたり、S 君や I さん、それぞれのホストと一緒に映画を見に行ったりもしました。でも 3 人とも理解することができず、爆睡していました（笑）。

あっという間に 1 週間が過ぎ、やっと生活に慣れてきた頃にホストチェンジがあって、Andy の家での生活が始まりました。私は犬や猫を見ると、ダッシュするくらい大の苦手なので、Andy の家に 2 匹ずついることを知った時は、不安で不安で仕方がなかったのですが、克服することができました！このホームステイでの大きな収穫です（笑）。

Andy は本当に家族仲が良く、運動神経抜群の女の子なので部屋にサッカーのトロフィーが数えきれないくらいありました。

夜になると、毎日のように弟がゲームに誘ってくれて一緒に遊びました。Wii というゲームをしたのですが、弟は負けても、"You did a good job !"と言ってくれたり、毎日洗濯物はないか聞いてくれたり、本当に心の優しい少年でした。

だんだん英語にも慣れてきて、お母さんと日本とアメリカの文化の違いについて夜遅くまで話した日もありました。そしてお母さんが "Your English is very nice !" と言ってくれた時は、嬉しくてたまりませんでした。

Kentlake 高校はとても綺麗な学校でした。学校にタータントラックがあって、アメリカの広さを感じました。

Keiko という英語も日本語も喋れる子がいて、私達、北野の 5 人に色々な手助けをしてくれました。Keiko も日本が恋しいみたいで、私達と喋るのをとても楽しみにしてくれていました。

2 週目はタコマツアーやチェリーブロッサムなどがあって、あっという間に日本に帰る日がきてしまいました。帰りたくなくて仕方ありませんでした。別れの寸前までは笑顔だったけど、やっぱり感謝の気持ちでいっぱい、空港では涙が止まりませんでした。Andy とまた会おうねと約束してお別れしました。

本当にあっという間で、充実した 2 週間でした。日本とアメリカの大きな違いは、アメリカ人は相手に遠慮しないことです。自分の意見をはっきり持っていて、自分のしたいようにする。特に服装なんかみんな個性的で、とても寒いのに半袖にビーチサンダルだったり...日本人は周りの目を気にしすぎなんだなぁと感じました。

このホームステイで本当に文化の違いを体で感じることができ、アメリカへの見方も変わりました。大人になってからアメリカに来て感じることもできない、高校の間に来たからこそ感じ取れたこともたくさんあると思います。

一生の思い出ができました！みなさん本当にありがとうございました。

忘れられない2週間

3年 Y.R

今回のホームステイは、1人だけで2つの家庭に1週間ずつ、全部で2週間をホストファミリーと普段通りの生活をさせてもらうというものでした。とても楽しみだったけど、不安な気持ちもかなりありました。

初めて空港で1軒目のホストファミリーと会った時は、緊張のせいもあると思うけど、速すぎて何をしゃべっているのか全くわからなかったし、自分から話しかけることはほとんどしませんでした。でもローレンもローレンの家族も、簡単な英語でとてもゆっくりしゃべってくれたので何とか理解できました。それに周りの人たちが英語しか話していないので、だんだん耳が慣れてきて、少し話していることがわかるようになっていった気がします。自分からもたくさん話しかけられるようになっていきました。

ホストファミリーの人たちは1軒目も2軒目もみんないい人ばかりでした。家では「おなかすいてる？」とか「洗濯しようか？」とかいろいろ気を使ってくれて、本当に嬉しかったです！！アメリカの食べ物は何もかもが大きくて、おどろいてばかりでした。学校が終わると毎日いろんな場所へ連れて行ってくれました。スケートをしたり、ボーリングをしたり、買い物やコンサートに行ったりしました。毎日疲れるまで遊んでいました。本当に楽しかったです！！

日本とアメリカの学校のシステムの違いにびっくりしました。授業中はみんな手を挙げて意見を出し合っていて、生徒が授業を作っているような感じでした。それにみんなとてもフレンドリーで、廊下で会ったら知らない人でもあいさつをしたり話しかけたりしてくれました。クラブはだいたいの人が2つか3つのクラブに入っているみたいでした。たくさんクラブに入っているのだからうらやましかったです。あと、専門的な勉強をする授業もたくさんありました。(陶芸や写真や車の分解など...)みんな自分の興味のある授業をとっていて、毎日が楽しそうでした！

1軒目のローレンは日本に興味があって、特に漢字の勉強を頑張っていました。いろんな漢字が知りたい!と言っていたのでたくさん漢字を教えてあげました。とても喜んでくれていたので私もとてもうれしかったです。

2軒目のローレンはおはしの使い方を知らなかったので、教えました。でもかなり難しいみたいで、おはしで何もつかめてませんでした。あと、ローレンには3人の弟と妹がいて、ローレンが宿題をしている間はその子たちの遊び相手をしていました。日本人の小さい子の相手をするのだけでも大変なのに、大丈夫かなあ？言葉通じるかなあ？とかいろいろ最初は心配だったけど、遊んでたら言葉を使わなくてもジェスチャーとかで通じるので安心しました。けん玉とかだるま落としの遊び方を教えました。

2週間という長い期間だったけど、意外とあっという間に終わってしまいました。ホストファミリーの人たちと別れるのはとても辛かったです…。いろいろな大切なことを学べたこの2週間のホームステイの思い出を、ずっと忘れないようにしたいです！！

かけがえのない思い出

3 年 S.H

出国前日。日本を離れる不安はもちろん感じていましたが、それと同時に、初のアメリカ訪問を心待ちにしていました。

8 時間のフライトを終えてシータック空港に到着すると、1 軒目のホストファミリーであるレイン家のお母さんと、ホストのジャスティンが迎えに来てくれていました。そして、いよいよここから正に英語漬け。誰も助けてはくれません。しかし、家に向かう途中、車の中で会話をすると意外と通じたので少しほっとしました。簡単な会話ならいけるとそのとき思いました。

レイン家はお父さん、お母さん、兄のエリック、ジャスティン、妹のステファニーの 5 人家族でした。みんな優しく、ぼくに積極的に話しかけてくれました。その日の夕食を食べてから、アイスクリーム屋さんに行きました。ぼくはそこで最小サイズのアイスクリームを注文したのですが、その大きさに驚きを隠せませんでした。ぼくが食べるので必死になっていたところ、ステファニーが特大サイズをべろりと食べたので、ぼくはびっくりしました。

翌日からケントウッド高校での生活が始まりました。ジャスティンの選択している教科は日本語、アメリカ史、数学、英語、化学。これが毎日変わらないことが、日本と違う点でした。

日本語の授業は、とても楽しかったです。やはり日本人が来るのは珍しいのか、みんな好奇心に満ちあふれているようでした。ただ、ほとんど英語で質問攻めでしたので、英語の勉強にはなりましたが、精神的にかなり疲れました。

数学の授業は簡単でした。sin, cos, tan のグラフをしていたので、日本に比べてかなり遅れているな、と思いました。

全体的にケントウッド高校の授業は、日本とは全然違うものでした。生徒や先生は飲み物を飲んだり、お菓子を食べたりしていました。また、先生だけでなく生徒も積極的に授業に参加していました。たとえば、生徒が授業中質問をふつうにしたり、口々に意見を言い合ったりしていました。さすが自由の国、アメリカだなと、妙に納得させられました。また、授業中いろいろな人としゃべりました。そのときに必ずといっていいほど言う言葉が、(電子辞書を指して) What ' s this? でした。アメリカには電子辞書というものがないのか、あるいは極めて珍しいのか、好奇の目で見てくるのです。また、のど飴をいろいろな人にあげて、These are throat candies. といったら、Cool. と言ってくれました。

土曜日には、家族とシアトルの観光に行きました。まず、ワシントン大学に行きました。桜が満開で、とてもきれいでした。それから、市場やスターバックス 1 号店、スペースニードル (タワー) にも行きました。久々に街に出て楽しかったです。

そのような日々が 1 週間続き、ホストが変わりました。2 軒目のホストファミリーはヤナムラ家でした。ホストのジャッキーは昨年の夏に北野高校を訪問し、ぼくも少しだけ話したことがあったので、会うのは 2 回目でした。ヤナムラ家は、お父さん、お母さん、兄

のジェイソン、ジャッキーの 4 人家族でした。家に着いた瞬間、本当に驚きました。大きな庭、ホームシアター、目の前が湖、いつでもボートに乗れる、アイスクリーム屋さんがありそうなアイスクリーム……夢に描いていたような生活をしていたので、うらやましくてしかたがなかったです。さらに、ヤナムラ家ではお母さんは政府で働いていて、主にお父さんが料理を作ってくれましたが、その料理がまるでレストランで出てきそうなもので、本当においしかったです。ケーブルテレビの料理番組を見て、日々勉強中だということです。

翌日から、ケントレイク高校での生活が始まりました。一番最初に数学の授業を受けたのですが、ケントウッド高校での授業を見てきたぼくは、また簡単なんだなと思っていましたが、全く逆でした。ジャッキーは発展の数学を選択していて、文系のぼくには理解不能な $\sin$, $\cos$ の積分をしていました。また、授業もみんな真剣に聞いていました。その日は、学校を早退してお父さんと潮干狩りに行きました。日本とは違って、掘ると大きなアサリが大量にあったので、びっくりしました。およそ 30 分で、50 個くらい採れたと思います。それは、翌々日食べましたが、とてもおいしかったです。

ジャッキーは、勉強、チェス、ゴルフがとてもできて、完璧な子でした。夜遅くまでパソコンで勉強していたのが印象的でした。

金曜日には、チェリーブLOSSAM フェスティバル（桜祭り）が催されました。ぼくたち（阿武野高校と北野高校の生徒）は、日本で練習したパラパラを踊りました。観客はとても楽しんでくれたので、踊ってよかったなと思いました。そのあと、ケントウッド高校の生徒やジャスティンと茶の湯のブースに行きました。そこを取り仕切っていたアンナは京都に 6 ヶ月ホームステイしていたらしく、着物を着てとても慣れた手つきで行っていました。ぼくは茶の湯が初めてだったので、少し緊張しましたが、楽しかったです。そして、出国の日。2 週間は本当に短いものだなと、そのとき初めて感じました。レイン家、ヤナムラ家と惜別の情に浸りながらも、アメリカを去りました。

この 2 週間は、ぼくの人生の中で本当に貴重で、有意義で、忘れられないような日々でした。最後に、この国際交流に協力してくださいました全ての方々に感謝の念を述べたいと思います。本当にどうもありがとうございました。

We share the same sky

3 年 S.D

期待と不安で一杯だった 13 時間のフライトを終えアメリカに到着。一週目のホスト Danel Bacon 家も、二週目のホスト Greg Ikeda 家も、僕をとてとても温かく迎え入れてくれました。初めは自分のことを話すのでも精一杯で、何より感じたのは自分の単語力不足。喋る時に最も重要なのは文法よりも単語なのだと思います。それともう一つはヒアリングの能力。相手が何を言っているか分からなければ、自己紹介はできても会話はできないのです。しかしそんな中でも 2,3 日経つと次第に耳が慣れてきたのか、相手の言っていることが分かるようになっていきました。もちろん言葉が通じなくてもある程度は意思の疎通ができるけど、やっぱり「話す」方が楽しくて、それからの毎日はより一層素晴らしいもの

になりました。

平日はホストに付いて学校に行き、普通に授業を受けていました。もちろん内容なんてサッパリでしたが、向こうの学校の授業では生徒は積極的に授業に参加していて、先生や他のみんなに意見をどんどん発表するので、とても賑やかで楽しかったです。でも集中するところではキチンと集中して、先生や友達の話の聞こえを聞こうとします。また演劇やオーケストラ、写真や陶芸、車の解体なんて授業もあって専門学校としての役割も担っているようでした。どの授業も本当に楽しそうで理想的な学校だと思いました。放課後にはクラブやバイトなどに向かう生徒も多く、それぞれに高校生活を満喫しているようでした。僕も二週目にはホストに付いて行って陸上部に参加しました。日本とは違いクラブの掛け持ちが簡単なので、色んなクラブの子たちが集まっていて、「これはこれで楽しそうだな」と思いました。交換留学生の僕達にみんなはすごくフレンドリーに話し掛けてくれて、友達もたくさんできました。特に一週目のケントウッドには日本語のクラスがあって、その授業を受けている人たちは日本に興味があるらしく質問攻めにあいました。日本に興味を持っていてくれる人が思っていたよりもずっと多かったのが嬉しかったです。

学校やクラブが終わると僕はホストやその友達と一緒にシアトルの街にくりだしたり、ショッピングモールで買い物をしたり、映画館で映画を見たり、ボーリングをしたり、友達とレストランに行ったり、二週目のチェリーブロッサムフェスティバルでは日本文化としてパラパラを披露したり・・・毎日毎日、とても充実した日々を送り、日本に帰りたくない！と何度も何度も思いました。

アメリカはホントにダイナミックな国です。家からスーパーからイチゴや牛乳パックまでありとあらゆるものが大きいのです！「赤ちゃんが入ると溺れます」と書かれた大きなバケツのような容器に入った醤油も見つけました。食事の面で言うと少し油っぽいもののが多かったのですが、ピザやスパゲッティ、ハンバーガーなど美味しいものもたくさんありました。特筆すべきはマクドナルド。日本よりも少し小ぶりのハンバーガーは肉がとてもジューシーで感動しました！しかし、お菓子は一樣に甘すぎました・・・日本では甘いもの好きだったはずなのに、いつのまにかデザートを避けるように・・・甘すぎるお菓子は飲み込むと喉が痛くなります。またジュースにはふんだんに着色料が使われていて、飲むと舌に色がつきそうな気がしました。

よく「人種のサラダボール」と例えられるアメリカ。その言葉通り、どこへ行ってもありとあらゆる人種の人が入り込んで驚きました。同じヨーロッパの中でも国によって全然顔や髪の色が違う、どんなに地図で見たら近い国でもそこに住んでいる人たちはやっぱりそれぞれ違う——そんな当たり前のことにも気づきました。向こうでは「～系」のアメリカ人で、英語の他にもう一言語話せるバイリンガルも多く、本当に色々な人たちがいました。こんなに様々な文化や人種がいるから、当然考え方や意見も幅が広がって、視野も広がるんだろうな、とも思いました。

夢のような2週間を終えて帰国。ホストファミリーは空港まで送ってくれて最後の最後まで見送ってくれていました。みんな別れを惜しんで泣いてくれて、短い間だったけど本当の家族になれたみたいで、すごく、すごく嬉しかったです。たった二週間のホームステイ。でもそれは僕に世界の広さを教えてくれました。世界は日本だけじゃなくて、もちろんアメリカだけでもない。この世界にはありとあらゆる人が自分と同じように生きている

——そんなことを実感をもって教えてくれました。せっかくできた、もうふたつの家族とたくさんの友達と離れるのは寂しかったけど、飛行機でたったの 13 時間。会えない距離じゃない。日本に帰ってきてすっかりこっちの生活に戻ったけど、今でもやりとりを続けているアメリカの友達からはよくメールが来て、嬉しくなります。世界は広いけど、同時に小さくて、この同じ空の下で僕らはまだ繋がっているんだ、と感じられるから。

Kentwood 高校編 (2007 年 3 月 18 日 (日) ~ 3 月 25 日 (日))

養護教諭 濱崎 優子

シアトル行きの飛行機に乗るために、伊丹から羽田へ飛び、リムジンバスで成田についた頃には、もう一旅終えてしまったかの様でしたが、ここからが出発です。出国手続きでは、思っていたより手間取りました。滞在先の住所をコンピューター画面でアルファベット入力することを求められ、どぎまぎしてしまいました。およそ 8 時間半の長いフライトを終えて空港に着くと、ホストの方々が笑顔で出迎えて下さりやっとほっと出来ました。そして、生徒たちはそれぞれのホストへと引き取られていきました。

私がホストをして頂いたミヤーン先生はケントウッド高校で日本語のクラスを持たれ、この国際交流を一人で担当されている方で、そのため非常に多忙で、その前週から、風邪をひかれていました。この日も、ご体調が悪いなかでしたのに、笑顔で迎えて下さったのでした。

さて、ミヤーン先生のお宅は、ケントウッド高校から車で 40 分程かかるところにあります。交通渋滞を避けるため、朝食抜きで 5 時 30 分には車で出勤されているとのこと、私も、月曜日から金曜日の 5 日間、まだ真っ暗できれいな夜景の見える中、ミヤーン先生の車に乗せて頂きました。

学校に着くと、まだ青い世界です。人気のない校舎に入り、ミヤーン先生の日本語教室に連れて行って頂きました。その部屋は、カラフルなひらがなのカード、日本地図、浮世絵、羽子板など美しく飾られていて、ミヤーン先生の日本語教育に対する熱意が伝わってきました。この部屋で、まだ 1 時間目まで時間があるので、朝食を頂きました。ミヤーン先生は普段は、ミルク程度なのだそうですが、私のために、コーンフレイクとポテトチップス等を用意して下さいました。しかしながら、まだ、シアトルはかなり寒いので、冷たいミルクのコーンフレイクを頂くと、ますます寒く感じられました。ところが、驚いたことに、ミヤーン先生はとても元気で、「I am hot, hot! 私はとても暑いのです。」とおっしゃられ、冷たいミルクを飲まれていました。この習慣の差は大きかったのですが、なぜかシアトルの方々のなかには、まだまだ寒いのに、T シャツや、ランニングの方もおられ、驚くことが多くありました。人によって寒暖の感じ方は様々だと思いますが、日本では、あまり見られない驚きの光景でした。

さて、第一日目は、ホストの Justin と Beth さんが学校案内を丁寧にしてくれました。廊下は大きくとってあり、天井も高く広々とした校舎でした。日本のように先生が教室を移動するのではなく、生徒が各科目の教室に移動する形式なので、休み時間になると、広い廊下も移動の生徒でごった返します。授業は、1 時間目は 7 時 35 分から、6 時

間目は 2 時 10 分までと早く始まり早く終わります。私はミヤーン先生の日本語のクラスに 1 時間目から 6 時間目まで、この 1 週間ほぼ参加させて頂きました。日本語で自己紹介したり、それをたどたどしい英語に訳したり、班に分かれて日本の話題を話し合ったり、日記のチェックのお手伝いをしたりしました。大体 20 人前後、9 年生から 12 年生（日本の中学 3 年生から高校 3 年生）のクラスでした。

授業に参加していて気が付いたことがあります。10 時頃に、放送がなり始めると、（何をいっているのかさっぱりわからない。）突然、座っていた生徒達が立ち、スピーカーのほうに向かって、胸に手を当てていました。後で、ミヤーン先生にお聞きすると、国旗に対して敬意を表しているそうで、これは、どんなときであっても、手を止めてすることなのだそうです。

第 3 日目は、忙しい日となりました。第 2 週目の高校のセントレイク高校に車で移動し、昼食を兼ねたウエルカムパーティに参加しました。そこで、レイクの校長先生から、一人ずつ証書と記念品を頂きました。またセントウッド高校に戻ってからは、放課後に、日本クラブの生徒の皆さんが手作りのケーキや料理を持ち寄って、ウエルカムパーティをしてくれました。中には、京都に半年間ホームステイしていた生徒さんもいて、とても盛り上がりました。セントウッド高校の在籍者数は約 2300 名ですが、その中に、少数であっても日本にこんなに興味を持っていてくれる人がいるということは、とても嬉しいことでした。

この日の生徒たちの学校での活動はここまでですが、先生方は、放課後に教科別保護者個別懇談が体育館でありました。私もミヤーン先生の隣に座って、全く話の内容はわからないのですが、参加し、帰りは 8 時頃になりました。

第 5 日目の学校最終日は、3 時間目に日本語クラスの生徒の皆さんが、パーティをしてくれました。皆さん全員で分担を決め、手作りのケーキ、ゼリー、サラダ、そして納豆巻きなどを用意してくれました。ホームステイ当初は大人しかった本校生徒も、遅くなってきて、会話を楽しんでいる様子でした。セントウッド最後の日に素敵な思い出ができ、感謝しています。その後、昼食の時間帯に、本校の生徒全員で書道をしました。名前を適当な漢字に当て字をするというものです。とても沢山の生徒さん達が参加してくれて、途中、用紙がなくなってしまうほどでした。普段は、日本に興味がない生徒さん達も、楽しんでもらえたのではないかと思います。

ところで、私は養護教諭で普段は保健室にいますが、アメリカでは、スクールナースがこれにあたるようです。セントウッド高校でも事務所の一角に保健室がありました。訪ねてみると、お忙しくされているなかでしたのに、お話をして下さいました。そこで、私の拙い英語力ではありますが、少しインタビューすることが出来ました。

Q. 日本では養護教諭は身体的、精神的両方のケアをしますが、アメリカではどうですか？

A. アメリカでは、救急処置、長期的計画におけるケア（21 人の糖尿病の生徒が在籍しており、インシュリン等の管理、緊急時の対応などをする。）ときには、カウンセラーのような精神的支援もする

Q. 日本では、養護教諭は 1 学校に 1、2 名いますが、アメリカではどうですか？

A. 本校は今私一人で約 2300 名の生徒を見ています。でも、去年は、1 日だけ、精神

遅滞の生徒のために看護師さんがきていました。(ケントウッド高校には、精神遅滞等の障害のある生徒さんのクラスもある。)

Q . アメリカの学校には、スクールカウンセラーがいますか？

A . います。本校には男性 3 名、女性 3 名の 6 名います。予約すれば相談できます。

最後のスクールカウンセラーについては、その多さに驚きました。しかし約 2300 名の在籍者数の学校ですので、必要なのだろうと感じました。もう少し、利用頻度などお聞きしたかったのですが、残念ながら英語力がついていきませんでした。しかし、お忙しいなか、非常に拙い英語でしたのに、笑顔で、温かく答えてくださり、とても有難く感じました。

さて、金曜日の夕方には、ミヤーン先生と夫のディーンさんが、車でダッシュポイントという海岸に連れて行って下さいました。海岸に行く途中の、苔むした森はとても美しく、また、海岸では、アライグマに出くわしたりと、雨の降るなか、自然を楽しみました。そして、帰国前日の土曜日には、ミヤーン先生は過労でお疲れのところでしたのに、娘さんが現在通われているワシントン大学へご家族一緒に連れて行って下さいました。とにかく、広大な大学で、その広さは、2.8k m²もあります。140 年以上の歴史があり、学舎のそれぞれが歴史的な重厚な空気を漂わせていました。ある大通りでは、満開の染井吉野の並木が私達を出迎えてくれました。これは、そろそろ日本が恋しくなっていた私にとっては、最高のプレゼントでした。ワシントン大学を満喫した後、スペースニードルという高さ 184m の塔にも連れて行って頂き、シアトルの美しい景色を楽しみました。

最後になりましたが、本校の生徒は、いろんな体験をさせていただき、有意義な時を過ごすことができたと思います。生徒達を温かく迎えて下さったホストの皆さん、ケントウッド、ケントレイク両校の先生方、生徒の皆さん、そして、通常勤務のなか、一人で国際交流を担当され、ご体調を崩されるほどの忙しさのなかで、私のホストを引き受けて下さったミヤーン先生に心から感謝を申し上げます。

Kentlake 高校編 (2007 年 3 月 25 日 (日) ~ 4 月 3 日 (火))

生物科 小西 喜朗

3 月 25 日 (日) シアトル到着

午前 10 時 30 分にシアトル タコマ空港到着。

入国審査を受け、手荷物を受け取り、シャトルに乗る。空港の出口に行き、手荷物が出てくるのを待つ。ミヤーン先生が私を見つけてくれた。手荷物を引いて、導かれるままミヤーン先生について行く。ごった返している待合室で濱崎先生と会う。5 人の生徒は元気に過ごしていたと、連絡を受けた。

11 時頃シアトル・タコマ空港を出る。午後 1 時から Covington 市の God-father's Pizza でホストファミリーの交代である。それまで、少し時間があるので、ショッピングモールとデイスカウント - スーパーマーケットを案内してもらった。

午後 1 時過ぎ、Pizza 店にミヤーン先生と到着。既に多数のファミリーが到着していて、Pizza Party は始まっていた。店の奥の部屋を貸切にしていた。ケントレイク高校の

教頭メルトン先生が仕切っている。日本の能登半島地方での大地震がアメリカでも報じられ、大阪には被害はなかったのか、と尋ねられた。前半の週にホストをしたファミリー、そして、後半にホストをするファミリーを前に私は紹介され、私は簡単に挨拶を述べた。

Stowell 夫婦とともに、Chuck が運転するクルマで Stowell 家に向かう。15 分ほどで到着する。ステイ先の紹介をする。Mr. Chuck Stowell は、Kentlake High School の音楽 (JazzBand) の先生で、夫人の Elena は、Kentwood H.S. の生物の先生である。

高原の別荘地のような雰囲気のに Stowell 家は建っている。前庭には草が生えており、Eason (中学 1 年) と Carson (小学 4 年) の 2 人の息子さんと近所の少年とで 3 人が野球のバッティングをやっている。家に案内される。Kentlake 高校に通う 1 年生の Carly が出迎えてくれる。平成 16 年の夏、アメリカからのホームステイの際、母親の Elena と Carly が我が家に泊まった。3 年ぶりの再会である。

リビングが 2 部屋、食堂も 2 箇所ある。よく使うのは、キッチンの横の食堂とリビングである。こちらのリビングにはテレビが置いてあり、また、ペットの gecko (ヤモリ) 2 種類がガラス鉢で飼育されていて、家族が集う。もう一つのリビングは専ら子ども部屋という感じで、息子さん 2 人が使っている。もう一つの食堂はあまり使われていない。私は、玄関に入って左側の寝室を使わせていただく。

Carly が近くの湖を案内してくれるという。家を出て、車道を横切り、草地を進む。ご近所の敷地内を進み続けると湖がある。生後 8 か月と言っても十分大きく体長 120cm、元気のいい Stowell 家の愛犬もついて来る。Carly がボールを遠くに投げると、必死になって突進し、口にくわえて戻って来る。ボールを湖の中に投げ込んでも、口にくわえて戻って来る。まだ寒い 3 月末に、水も冷たく、寒いだろうと思うのだが、犬は元気だ。冷たい水をものともしない。湖水に濡れた毛は、全身を身震いさせて、水を飛ばしている。

家に戻り、Carly と雑談していると、「さあ、出かけますよ。」と Elena が言う。そうだ、今日は、Eason の 13 歳の誕生日だ。Carly のバスケットボール友だちと Eason の友だちを途中で乗せて、20 分ほどドライブする。レストランに入る。各自が好きなメニューを注文し、程なく料理が運ばれてきた。食事開始の前に、HAPPY BIRTHDAY の歌を歌うのだろうと思っていたが、特に歌わない。お互い他人が注文したものにも手を伸ばしてわいわい言いながら楽しく食べた。

夕食が終わったのは、5 時頃、サマータイムでまだまだ明るい。「次はシアトルに行く」と、Chuck が言う。ハイウェイを飛ばす。時速 70 マイル / 時だから、時速 110 km くらいか？片道 5 車線。クルマはスムーズに流れている。シアトル マリナーズの SAFECO FIELD を通り過ぎていく。

SONICZONE というプロバスケットボール場 (屋内) に着く。私には馴染みのないチームであったが、ゴールにシュートがきまるたびに大歓声だ。応援音楽の低音が体の芯までずんずん響く。飲み込まれるようなものすごい雰囲気だ。合間には、アトラクションが用意されており、楽しめた。帰宅したのは、9 時半くらいであったか。

3 月 26 日 (月) ケントレイク高校の授業

学校の 1 時間目は 7 時 35 分から始まる。早い。

Mr. Stowell の授業は、0 時間目 (6 時 35 分 ?) から開始だ。

5 時 30 分に起床する。サマータイムに移行してるので、普通の時刻設定では 4 時 30 分と

言うことになる。6時00分から朝食、まだまだ暗い6時30分に家を出発する。

6時40分に学校に到着した。やっと少し明るくなりかけてくる。Chuckが、控え室に先導してくれた。教員室の教頭先生の隣の部屋が控え室となっていた。その部屋の中央にあるデスクには、生徒5人と私の6人分のモーニングバー（チョコバーのようなスティック状の食品）が用意してある。壁際のテーブルには、お湯のポット、4種類（ウーロンティー・緑茶・アールグレイティーなど）のティーバッグ、ポリスチレンのティーカップ、500mlのミネラルウォーター20本ほど、アップルジュースとグレイプジュースが混ざって20本ほどが用意されている。さらに、ドーナッツが10個ほど入った菓子箱が用意されていた。もう、この歓待ぶりには、感謝、感謝である。

7時00分 控え室に次々と生徒たちが集まってくる。ステイ先の高校生も打合せのために付き添ってくれている。生徒たちは元気である。英語も日本語も話せる日本人の女子生徒（Kentlake H.S.の生徒。Iさん）が控え室に来てくれて、ケントレイク高校の授業の受け方など、我々の疑問点にいろいろ答えて教えてくれて、大変助かった。毎朝、この控え室に来てくれて、何かと疑問点に答えてくれた。また、昼食時にも生徒たちと行動をともにしてくれた。

7時30分 控え室で校長先生の挨拶、教頭先生からの連絡の後、Art（美術）のウォール先生が我々を連れて校舎内を案内して下さる。

3時間目は、ChuckのJazzBandの授業を見学する。途中で、自己紹介をし、その後で、いくつか質問を受けた。

4時間目は3分割されていて、3交代制でのランチタイムとなっている。私は、サンドイッチと野菜サラダ、ミルク、ジュースを選んで食べた。ボリュームたっぷりである。

廊下でこちらがうろうろしていると、見知らぬ生徒さんが、「どこか部屋を探しているのですか？」とか、「お手伝いしましょうか」とか、気さくに話しかけてくれた。ほのぼのと暖かいものを感じた瞬間であった。ケントの学校の事務員の方は、分からないことがあると、それに対してにこやかに笑いながら教えてくれた。

6限の授業は2時10分に終わる。これで授業はすべて終了である。北野高校では、放課後、クラブ活動が活発に行われるが、ケントレイク高校では、放課後は、生徒たちはあまりいない。アメリカンフットボールと2～3のクラブが活動している程度だった。

帰宅して、食堂でお茶を出してもらい飲んでいると、Elenaが「小学校に行こう」と言う。Carsonが通う小学校にElenaと向かう。文化発表会があるという。詳しくは分からなかったが、Carsonの発表作品は、寒天ゲルにレーザー光線を照射して固化させたというものであった。

帰宅後、リビングでくつろいでいると、夕方にCarlyのバスケットボールチームの打ち上げパーティー（親子会）が、ケントレイク高校で催されるという。CarsonもEasonもElenaもChuckも家族総出で参加である。ElenaもChuckも普段は帰宅後バスケットボールの指導者としても活動中なのだ。Stowell家は、ホントにBUSYなFAMILYである。

3月27日（火）コピントン市長訪問

夕食を済ませ、コピントン市役所に集まる。市役所内を案内して頂き、その後ホールに案内される。阿武野高校、北野高校の付添教員・生徒それぞれ一人ずつ名前を呼ばれて、市長から宣言書を授かった。宣言書には、「3月30日を日本生徒との交流の日とする」

と記されている。市を挙げて、日本との国際交流に力を入れているのだなと感じられるセレモニーである。記念品として、羽子板を贈呈した。

3月28日(水) タコマ市ヘツアー

この日は、朝から、大阪の2校、東京・広島の高校の教員と生徒が、1台のスクールバスに乗ってタコマ市ヘツアーに出た。

スタジアム高等学校では、日本語クラスを見学する。我々日本人は教員も生徒も英語で自己紹介、スタジアム高校の生徒は日本語で自己紹介をした。

館内を見学した際、図書室前にあった「NO GUM NO FOOD NO DRINK」の掲示が印象に残った。

バスで移動し、海岸縁で昼食、1833年に建てられたという Nisqually 要塞を見学し、タコマ市にある博物館を見学する。

3月29日(木) CBF(サクラ祭)のリハーサル

4限、昼食時に生徒たちは、アメリカ人の生徒の名前を漢字に直した当て字を毛筆で書くというイベントを実施する。例年のことながら、賑わっている。この最中にメルトン先生が5人の生徒めいめいにペットボトルの水を差し入れしてくださった。メルトン先生には、どれほど感謝しても十分感謝しきれものではない。

放課後、CBF(サクラ祭)のリハーサルで Kent-Meridian H.S.に移動し、ホールにて明日の開会式の要領を聞き、式典の練習をする。ピザパーティーがあり、その後、Kentlake H.S.に戻る。忙しい日である。Kentlake H.S.の学校説明会(次年度の新入生の保護者対象の説明会)が開かれる。一つのコーナーとして昼食時と同じように書道を実演する。次年度は、Kent-lake H.S.にも日本語クラスが開講されるようである。日本に対する関心が上がっているようだ。

3月30日(金) Cherry Blossom Festival(サクラ祭)

Kentlake High School、Kentwood H.S.、Kentridge H.S.と Kent-Meridian H.S.以上4つの高校が中心となって、関連団体も一緒に行っている合同文化祭である。今年は、Kent-Meridian H.S.で行われる。

5時30分から高校のホールで開会式が始まる。我々、北野高校・阿武野高校の生徒と教員、さらに東京・広島からの生徒・教員も壇上に並んで執り行われる。Kent-Meridian H.S.の校長、日本領事館代表者、ケント市長などの挨拶に続き、記念品の交換式があった。

6時から各会場に分かれて、各種催しが行われる。サクラ祭という名前には、日本文化を紹介するという意味合いも含まれているようだ。ケント地区の方々は日本に対して関心が非常に高く、日本関係の催しも多かった。体育館では、柔道・剣道の模範試合が披露されていた。メインホールでは、ブレイクダンス・パフォーマンス・音楽に混じり、琴の演奏、和太鼓の演技、盆踊りなどがあった。北野生は、阿武野生とともにパラパラダンスを踊った。

教室沿いのブースでは、空手模範演技、着物を着用しての記念写真撮影、盆栽展示、日本の習字等の催しがある。学生食堂の模擬店では、照り焼き・唐揚げチキン/寿司・焼きそば、おにぎり、鉄板焼きなども売られている。私が模擬店に焼きそばを買いに行ったら他のメニューも既に売り切れであった。残念。

年々サクラ祭に対する意識が高まってきていて、活発になってきているとメルトン先生から聞いた。この日から、ホームステイ先がメルトン先生の家が変わる。Elena が本日から他の州での教科の泊まりがけの出張に行くことになり、急遽ステイ先が変更になったようだ。学校から高速道路を走って 50 分くらい離れた場所で、高台の閑静な住宅街にある。息子さん 2 人は独立して家を出られ、夫人と二人住まいである。

3 月 31 日 (土) DINNNER TRAIN

今日は土曜日、学校はお休みである。ケント地区の先生方が DINNNER TRAIN に乗車する催しを企画してくださった。10 時半に駅に集合。大阪・東京・広島からの先生方とケント地区の 4 つの高校からの先生方が集まる。真っ赤な列車、SPIRIT of Washingt 号に乗り込む。レストラン列車である。4 人がけのテーブルは、メルトン先生夫妻と同席になった。列車は非常にゆっくり走り出す。食事を進めながら、景色を楽しんだ。ワイン工場で途中下車、ワイン樽が沢山並んだ倉庫等を見学する。ワインの試飲もできた。

4 月 1 日 (日) シアトルを離れる

朝、眩しさで目が覚めた。快晴である。寝室から出て食堂に出ると、遠くにレーニエ山がくっきり見えた。清々しい、すっきりした、ホントにいい気分である。身支度・荷物の整理をして、いよいよ、空港に出発。振り返れば、はやい 1 週間であった。空港には、北野・阿武野の生徒たちとそのホストファミリーの間でお互いに別れを惜しむ姿が見られた。

最後に

今、ホームステイ団が航空機の事故もなく無事に大阪に戻れて、本当によかったと思う。また、今回のプログラムで、沢山の方々に大変お世話になった。北野高校の国際交流委員会の皆さんを初め多くの先生方、そして、ケント地区の高校の先生方には本当にお世話になった。とりわけ、ストーウェル先生夫妻、メルトン先生夫妻には深い感謝の気持ちでいっぱいである。また、北野高校とケント地区高校との国際交流事業をしっかりと発展させていきたいという強い意志を感じた場面が多々あり、これに応えていかなければならないと強く感じた。